

フランス語の新たな略語形成における創造性 —SMS に現れる略語の形態的分析—

松田 里沙

1. はじめに

インターネットを介したコミュニケーションツールの一つとして SMS (Short Message Service) があるが、そこに現れる言語表現では規範的な表記に変形が加わり、SMS に独特な表記がなされている。

(1) g ht du kfé (Panckhurst 2009, 44)

J'ai acheté du café.

(2) est ce que tu vi1 ? (Ibid)

Est-ce que tu viens ?

上記の例では発音、文字名称に基づいて変形が行われている。このような簡略化や変形が発達したのは、SMS は E-mail 等と異なり字数制限が設けられ¹、短いメッセージの中で情報を伝達する必要性や、対話に近い即時的なコミュニケーションを可能にする媒体的性質が関係すると考えられる。しかしインターネットが普及する以前から、省略や略語といった表現形式はフランス語の話し言葉、書き言葉の中でも実際に行われていた。そこで本稿では、従来の略語形成法や有様との対比に基づき、インターネット空間における新たな言語表現の創造性を明らかにすることを目標とする。

2. フランス語における略語

2.1. 定義

日本語の「略語」に相当するフランス語に « abréviation » が挙げられる²。 *Grand Larousse de la langue française* (1971) によると、« abréviation » は以下のように定義されている。

1) Suppression d'une partie d'un mot, d'une expression : L'abréviation du mot « autobus » donne BUS. Id. est l'abréviation de « idem ».

2) Spécialement. Groupe de lettres auquel sont réduits un mot composé, une expression abrégée : U.S.A. est l'abréviation de « United States of America ».

また、Grevisse (1986) は上記の定義をより子細にする形で以下のように定義づけている。

¹ SMS では最大 140 オクテット (1 オクテット=8 ビット、最大 160 文字) の文字数が送信可能である。

² プチ・ロワイヤル和仏辞典 (1993) 参照。

L'**abréviation** est un procédé *graphique* consistant à écrire un mot en n'utilisant qu'une partie de ses lettres : *M.* pour Monsieur ; *n°* pour numéro. [...] Le but principal de l'abréviation est de gagner du temps et de la place. On a aussi des abréviations euphémiques, pour représenter des mots jugés grossiers ou inconvenants [...]

(*ibidem*, 138 §110)

つまり、**abréviation** とは単語の中の一文字あるいは数文字のみを残して簡略化する手法であると言える。それに対して、同じように単語の前部分を残し後続を落とすものとして « réduction » があり、日本語では「縮減」と訳される。**abréviation** では文字が問題になるのに対し、**réduction** では簡略化される位置は音節によって決まる。

a) Dans le **vocabulaire usuel**, la langue parlée réduit par ablation des syllabes finales (**apocope**) les noms d'une longueur excessive, en particulier les noms composés au moyen d'éléments grecs.

b) Dans les **argots**, le phénomène est en partie différent : les réductions sont plus nombreuses ; elles n'affectent uniquement ni des noms ni des mots d'une longueur particulière ; elles recourent à l'aphérèse comme à l'apocope ; elles ne respectent pas la structure du mot composé et terminent souvent la forme réduite sur une consonne ; il ne s'agit pas tellement d'économie [...] que de déformation [...]

(*ibidem*, 270-271 §189)

réduction に当たるものは発音上、意味上にも変化を起こさせよう点において **abréviation** と区別される。例えば **méto** は **métropolitain** が縮減された形であるが、縮減後の形自体でも発音でき、また「地下鉄」という独自の意味を持つようになることで、新たな語彙として確立される。

2.2. **abréviation** の種類

« **abréviation** » に含まれる略語には複数のパターンが見られ、それぞれにおいて規則がある。その種類について、以下のように分類できる (Grevisse 1986, Doppagne 2007)。

① 頭文字

p. = page, s. = siècle や M. = monsieur, N. = nord, S. = sud. など、単語の頭文字のみを残す。また、単語によって大文字化、小文字化が決められており、文の中のどの位置であっても大文字、小文字の文体を変えることができない。また略語化の標識として語末にピリオドを打たなければならないことも規則の一つである。

② 短縮

ある程度の文字数を持つ単語を短縮化するもので、hab. = habitant、hist. = histoire、art. = article、gramm. = grammaire などが例として挙げられる。これらの短縮形はほぼ確定しており、他の場所

で留めることができない傾向にある。また、①同様最後にピリオドを打つ必要がある。

③ 頭文字と語末字の結合

Dr = docteur のように、語頭と語末の文字を結合させることで省略する。語末字に関しては、Mme = madame、Mlle = mademoiselle など母音字の場合は一字に限られない。また表記する際、D^r = docteur, M^{me} = madame, n^o = numéro, v^o = verso, f^o = folio のように末字を小さくして上に置かれることもある。

④ 複合語の短縮

①から③までは単語における簡略化であったが、熟語化した複合語を短縮するものも *abréviation* に含まれる。これには主にラテン語からの借用語に多く、具体的には P.S. = *postscriptum*、N.B. = *nota bene*、c.-à-d. = *c'est-à-dire* などがある。

上記から定義に沿った略語化の傾向として、単語における略語の派生の仕方は事例ごとに一通りであり、残される文字は頭文字、語末字など位置によって決定される。

3. ノート取り研究 (*prise de notes*) における略語の分類

本章では、実践的に行われる略語化の先行研究として、学習者によるノート記述に着目したノート取り研究を取り上げる。学生がノートに書き留める授業内容は、口頭の話し言葉を書き言葉に変換することで紙面上の外部記憶として残され、保存し熟慮するために用いられる (Piolat, Roussey et Barbier 2003)。そのようなメッセージを残す記号体系には、話し手 (教師など) のイントネーション、繰り返し、ポーズなどの談話的特徴に沿う傾向が見られる。また、ノートを取る際に話し言葉を効果的に記述するために簡略化された言葉が多く使われる。そのような場で現れる略語について、Branca-Rosoff (1998, 2006) の分析を検討したい。

3.1. 縮約

- mais = ms
- nous = ns
- peut = pt
- beaucoup = bcp
- problèmes = pbs
- pourquoi = pq
- toutes = ttes

上記の例から、縮約ではいずれの単語でも母音字省略が起き、残されるものは特にその語彙を構成する上で重要である子音字である傾向があることがわかる。単音節、多音節の語ともに象徴

的な文字には頭文字、語末字といった位置によって決まるものが大半であったが、多音節の場合には性などの他の情報を持つ文字も残される傾向があった。また語末子音字や複数形マーカーが積極的に残されることから、象徴的な文字を選択する際に発音は全く考慮されないことがわかる。

3.2. 縮減

主に語の中間部を落とすものを縮約とするのに対し、語の後部を落としてしまうものを縮減とした。先の 2.1. では、縮減 (*réduction*) は意味上、発音上の変化を起こさせると述べたが、ノートの中では意味に大きく影響を与えるような語の変化があるとは考えにくいため、単純に語の後部を落とすものを全て縮減とした。

- 頭文字のみ

abréviation の一つと同様単語の頭文字のみを残すもので、*tableau* = t などがある。しかし *abréviation* ではピリオドを打つことが原則であったのに対し、ノートの中では見られない。また記号に関して、以下のような例が見られる。

- *même* = \hat{m}
- *comme* = \hat{c}

même の縮減形として、頭文字の *m* に *ê* の *accent circonflexe* を加えた形で表す。この記号を用いることで、他の語ではなく « *même* » に解釈を限定させる機能がある。またその応用として、*comme* にも同様の記号の使用が観察された。*comme* には *accent circonflexe* は使われていないためこの記号を用いるのは不自然であるが、まず先に *même* = \hat{m} の縮減があり、同じく /m/ の音を持つことから *comme* へ転移したと考えられる。

- 単語の後半を縮減

定義における *réduction* と最も近く、音節によって脱落箇所が決まる。しかし解釈の補助として音節に加えて子音字を加える場合や、簡略形が母音にて終わる場合も頻繁に観察され、*réduction* の定義と沿わない独自の発展をしている。以下に例を挙げる。

- *acteur* = act
- *par exemple* = ex
- *niveau* = niv
- *temporelle* = tempo³
- *argumentation* = argu

³ « o » のように最後が母音で終わるものについて、寄生的接尾辞添加 (*suffixe parasitaire*) が考えられる。他に *dictionnaire*=dico や *réfrigérateur*=frigo などが挙げられ、主に口語的に用いられる (Brunet 1980)。

また品詞によって共通する接尾辞を持つ場合、共通した表記によって縮減するものが見られる。具体的には以下のような例が挙げられる。

接尾辞 *-ment*

- *actuellem^t*
- *événem^t*
- *rassemblem^t*

-ique

- *caractéristiq*
- *historiq*

-ion

- *argumentat^o*
- *composit^o*
- *transformat*

上記の例から、接尾辞の縮減は脱落させるのではなく *abréviation* の一つとして見られたような補助的な文字や記号として視覚化させていることがわかる。

以上から、ノート記述の中の略語形成の傾向として、視覚的な手がかりを残す点、共通した要素を持ちうる語に対し類推が可能であり規則が生まれるという点が指摘できる。

4. SMS に現れる略語

以上にて表記体系における略語を概観してきたが、本章から SMS のメッセージに見られる略語を分析していく。まず分析の先行研究として Béguelin (2012) による *langage SMS* の分類を用い、その中で略語形成にかかわる観点を明らかにする。そしてその分類を基に略語に関わる下位分類を提示しながら先行研究の分類の再検討を行う。

本章の分析では Béguelin における例文と SMS の公開コーパス (88milsms⁴) を用いる。特に記述がない限り、4.1.節では例文、4.2.節ではコーパスからの引用である⁵。

⁴ L'université catholique de Louvain の研究センターCENTAL (Centre de Traitement Automatique du Langage) による SMS コーパス構築プロジェクトである sms4science のフランス語版で、L'université Paul-Valéry Montpellier 3 によって作成。SMS メッセージの提供者は 12~66 歳の男女 (30 歳以下が 80%を占める) である。またコーパスは 2011 年に収集されたものであるため、分析もその時点における表現に限るものとする (Panckhurst 他 2013)。

⁵ 山括弧の補足は全て筆者による。

4.1. Béguelin (2012) による Langage SMS の分類の再考

BéguelinによるSMSに現れる言語表現の分類は6項目あり、その内4項目を本節で取り上げる。扱わない2項目については、語の簡略化や変形に加えて顔文字など非言語表現を図像化する記号や、簡略化とは逆に言語の冗長性を表記する形態素について述べられているが、本稿では略語に注目するため、ここでは触れないこととする。

4.1.1. ユニットの収縮

(3) Çavatoi,tabiendormi?

(4) Heu je me souviens plus:ver <quelle heure>**keleur**?

(5) Alor Ça c <trop bien>**trobien**!on est aussi <dans l'allégresse> **danslalégresse!** et on vous embrasse bien for.

(3) は一文が一つの語であるかのように収縮している。しかし実際に発音してみると、発音のリズムが収縮された表記と類似していることがわかる。(4)、(5) では、一つの句を構成する統語的な括りで収縮していると同時に、発音の括りとも一致している。特に (4) では同じ音を持つ文字への置き換えを行うことで、「quelle heure」がまるで一語であるかのように表される。

ここで使われるユニットとは、発音されたときに一括りとされる部分のことである。例からわかるように、ユニットにおいて文、語句、熟語のような正書法による区別は意味を成しておらず、括りとされる部分はイントネーション、抑揚による区分に基づいている。つまりこのユニットの形成には、正書法のような書き言葉としての表記法ではなく、話者 (=メッセージの書き手) が語や文を実際に発声するときのリズムグループと関連している。従って、この表記はプロソディの観点から簡略化していると言える。

4.1.2. 略字化

(6) Tu fai <quoi>**koi** de bo toi?

(7) <aujourd'hui>**O**jourd'ui, il ne fésait pas trè <beau>**bo**.

(8) on à quasi pas <eu>**u** de bouchon!

文字の置き換えは、同じ音を表しつつ複数の文字を一文字で収めることで単語を短く表すために用いられる。Béguelinは文字の置き換えについて、「au, eau」は「o」、「ai, er」は「e/é」になるなど規則的な対応関係があることを指摘している (Ibid, 54)。これらの文字はそれぞれの音素に関わり、文字レベルでの音声的観点による簡略化であると言える。

4.1.3. 音節文字の創出

(9) A <demain>**2m1**

(10) Yep!ca joue? Quoi <de neuf>**d'9**?

(11) <C'était>**c t** super hier!

4.1.2.同様、単語自体を短く記述するために音声に準じて文字を変化させているが、この場合は単語全体に影響し、また文字だけでなく数字も使用される点において独特である。冒頭で挙げた(1)、(2)の例もこの分類に当たる。

文字名称や数字を音声で捉え、語が持つ音に合わせて当てはめる手法については SMS の表現に関する分析で頻繁に取り上げられることである (Véronis et Guimier de Neef 2006, Panckhurst 2009)。特に Panckhurst (2009, 42)では、この手法は「*abréviation* と *abrégement* の接点において」導入されうると述べている。しかし、Béguelin はこの分類に対し「音節文字の創出 (*Création de syllabogrammes*)」という表現を用いていることから、この表現をこれまで捉えられてきた「略語」から逸脱した新たな文字表現として捉えようとしていることが窺える。

4.1.4. 子音字を残した略語化

(12) <J'espère>**Jspr** ke c allé. [...]

(13) Yop. <Désolé(e)>**Dsl** mais ça va pas le faire. [...]

(14) Merci,t <trop>**tp** chou!

発音に準じない簡略化として、母音字省略が挙げられる。主に骨格となる子音字が残されるが、このような簡略化は *abréviation* やノート取り研究においても見られた現象であるため、それらの形成法の類推が行われていると考えられる。

また、母音ではなく発音しない語末子音字を落とす例もこの分類に含まれている。

(15) Tu <peux>**peu** me <dire>**dir** se kon ma comme **devoir**⁶ pour demain stp

(16) Jt souhaité un <joyeux>**joyeu** <anniversaire>**anniversair**!

(12) – (14) の例における略語は発音することができないのに対し、(15)、(16) は明らかに発音と関連した脱落が起こっている。従って、この分類には表記の観点、もしくは音声の観点のどちらかによる略語化が分類されていると言える。

4.2. 母音字省略における下位分類

4.1.の分類から、SMS の表現はプロソディ・音・表記の観点による、いわば変異のプロセスが異なる略語や省略がメッセージの中に混在していることが明らかとなった。しかし、母音字省略による簡略化を見ると、簡略化の手法が必ずしも単一ではない。コーパスの中では、大きく3パターンの異なる手法が観察された。

⁶ 太字 **devoir** には文字の脱落は起きていないと思われるが、出典の例文が太字であるため、そのまま掲載した。

i. 母音字を落とす+語末の子音字を残す

(16) <Salut>**Slt** <comment>**cmt** vas tu ? <Bisou>**Bsx**

(17) Oui pour 15h15 je part du boulot. <Cordialement>**Cdlmt**. Merci

(18) Bien sur pa de soucis, je sui dispo aussi demain <toute>**tte** la journee si ca t'arrange! Je bosse le samedi et j'ai repos le mercredi <maintenant>**mtnt**

ii. 母音字を落とす+語末の子音字を落とし、直前の子音字を残す

(19) Et oui c'est la mega fête <maintenant>**mtn**, jpeux faire ce que je veux en ta présence maintenant :D

(20) On fais <toujours>**tjr** comme je veux alors a toi **mtn** :)

iii. 語の一部を残し、他の語と共通する語頭・語尾を中の母音字を落とす

(21) <Exactement>**Exactemt** ! Un avant gout du paradis !

(22) je suis pas encore sur <montpellier>**mtpellier** mais si tu veux on peut faire ça demain.

i は語末子音字が残ることから、発音による制約は関係なく脱落が起こる。(18) **tte** のように、単独で情報を持つ母音字は省略されないことから、特に表記の観点が強くと現れている。それに対して ii は母音字省略が起こると同時に、発音されない語末子音字も脱落する。そのため、この簡略化が起こるには母音字省略は表記の観点、語末子音字省略には音声の観点が用いられるため、2つの観点が一語に対し同時に作用していることになる。

iii は主に表記の観点による母音字省略で、語の一部のみ適用される例であるが、上記2つと比べ出現は稀であった。(21) **Exactemt** の **ment**→**mt** への変形は3章におけるノート上の略語でも見られたパターンであるため、**abréviation** よりもそちらとの類似性が認められる。しかしコーパス内で観察された接尾辞-**ment** を持つ語の中で、一部を残した簡略化の例は (21) 以外に見られず、書き言葉からの転移が起こると断言することは難しい。

i と ii の比較において、母音字省略をする単語として **vraiment**、**toujours** が観察された。コーパス内から抽出した各パターンの実例数を以下の表に示す。

表 母音字省略・語末子音字省略におけるパターン分類の実例数 (全 88,523 例)

省略なし	vraiment	1152	maintenant	561	toujours	816
語末子音字を残す (i)	vrmt/ vmt	41/ 31	mtnt	56	tjrs	147
語末子音字を落とす (ii)	— ⁷	—	mtn	50	tjr	177

表から、語末子音字省略が起こるかどうかがというのは語彙によって決定されることが読み取れ

⁷ « **vraiment** » から形成される略語の可能性として、「**vrn**», « **vrn** », « **vmn** »などといった形が考えられたが、いずれも例は見つからなかった。

る。vraiment の場合、接尾辞 -ment を含むことから他の語との類推により語末子音字が落とされにくいと考えられる。一方、maintenant と toujours は両パターンで現れたが、パターン間において出現頻度は特に大差はなく、どちらが優先的に使われるということはこのコーパスから述べることができない。しかし、大差がないということは母音字省略+語末子音字省略の手法が SMS において浸透していると言うことができる。書き言葉における略語では語末子音字はむしろ象徴的な文字として捉えられていたため、この観点の混在はコンピュータを介したコミュニケーション特有の表現から発達したものであると考えられる。

4.3. SMS 上の略語形成の考察

先行研究を含めて SMS で見られる表現を概観すると、正書法の表記と大きくかけ離れていることが何よりも目につく。その変化の大きさの原因として、語を短くするために文字を「落とす」だけではなく別の文字や記号に「置き換える」手法をも取り入れているためであると考えられる。置き換えられる文字、記号は主に発音が共通するもので代替されるが、それと同時に母音字省略のような発音と無関係な操作を行うことができるように、異なる略語形成のプロセスが混合する可能性も持ち合わせている。

ノート取り研究で見られた紙面上の略語と比較すると、紙面では略語であるという視覚的手がかりを小さく残していたのに対し、SMS ではそのような視覚的手がかりは脱落するか、もしくは手がかりとしてではなく文字として再導入されている。これは紙面上では形式の制約なく書くことができるのに対し、SMS の場合は文字の大きさを変えることができず、また一直線上で表す必要があることから、先のような現象は表現が制限された結果であると言える。

5. 結論

本稿では SMS における略語表現についての先行研究の再検討を行ったが、SMS において語句や文を短くする操作は単なる「略語化」や「省略」に分類することができず、置き換えや変形が行われることで、新たな SMS の表現、つまり langage SMS を創造していると考えられる。その創造性の根底には、従来の abréviation や réduction の手法が取り入れられうるということが今回の分析で明らかとなった。しかし SMS が独創的であるのは、そうした元来持ちうる手法の類推だけではなく、リズムグループや発音といった「発話」と大きく関連する点である。そうした新たな手法が受け入れられる背景には SMS 特有の媒体的性質が関係すると考えられるため、今後は媒体の特徴と絡めてさらに分析していく必要がある。

参考文献

- Béguelin, M.-J. (2012) : « La variation graphique dans le corpus suisse de SMS en français » Caddéo, S., Roubaud, M.-N., Rouquier, M. et Sabio, F. *Penser les lanuges avec Claire Blanche-Benveniste*, pp.47-62.
- Branca-Rosoff, S. (1998) : « Abréviations et icônes dans les prises de notes des étudiants » Bilger, M. et al. (éd.). *Analyse linguistique et approches de l'oral Recueil d'études offert en hommage à Claire Blanche-Benveniste*,

- pp.286-299.
- (2006) : « Littératie et prises de notes. Le primat de la fonction iconique » *Pratiques*, 131/132, pp.187-198.
- Brunet, J.-P. (1980) : « La suffixation parasitaire en “o” dans le français populaire » *Meta : journal des traducteurs*, 25, n°3, pp.347-353.
- Doppagne, A. (2007) : *Majuscule, abréviation, symboles et signes*, Duculot.
- Grevisse, M. et Goosse, A. (1986) : *le bon usage*, treizième édition, Duculot.
- Guilbert, L., Lagane, R. et Niobey, C. (1975) : *Grand Larousse de la langue française*. IV, Larousse.
- Panckhurst, R. (2009) : « Short Message Service(SMS): typologie et problématiques futures » Arnavielle T. (coord.), *Plyphonies, pour Michelle Lanvin*, Université Paul-Valéry Montpellier 3, pp.33-52.
- Piolat, A. et Barbier, M.-L. (2007) : « De l'écriture elliptique estudiantine : analyse descriptive de prises de notes et de brouillons » *Langue française*, 115, pp.84-100.
- Piolat, A., Roussey, J.-Y. et Barbier, M.-L. (2003) : « Mesure de l'effort cognitif : Pourquoi est-il opportun de comparer la prise de notes à la rédaction, l'apprentissage et la lecture de divers documents ? » *Arob@se*, 7, 1-2, pp.118-140.
- [https://www.researchgate.net/publication/228587788_Mesure_de_l'effort_cognitif_Pourquoi_est-il_opportun_de_comparer_la_prise_de_notes_a_la_redaction_l'apprentissage_et_la_lecture_de_divers_documents]
- Véronis, J. et Guimier de Neef, E. (2006) : « Le traitement des nouvelles formes de communication écrite », in Sabah, G. (éd.), *Compréhension automatique des langues et interaction*, pp.227-248, Hermès Science.
- 恒川邦夫他 (1993) 『プチ・ロワイヤル和仏辞典』旺文社.

(まつだ りさ / 文芸言語専攻3年)